

牛を生かす酪農経営を目指して

神奈川県立相原高等学校 畜産科学科 3年 鈴木 穂乃歌

「牛はかわいいけど…、酪農家？」私の夢を話したとき両親は、こう問いかけました。非農家で育ったものの、牛は2歳の頃から触れてきました。山梨県にあるキープ牧場に通い続け、最初は牛が怖くて近づくといつも泣いていました。しかし、毎年通っているといつしか「怖い」という気持ちはなくなり、ゆったりと歩き、むしゃむしゃと草をはみ、時には元気に駆け回る。そんな牛たちの姿が大好きになりました。そして、相原高校畜産科学科に入学し、畜産部相原牛プロジェクトの部員として毎日牛と接する中で、酪農に底知れない魅力を感じるようになりました。

酪農の魅力を感じた最初のきっかけは、相原高校OBでもあり、相模原市で酪農を営む藤曲牧場で実習をさせて頂いたことです。ただ牛が好きだから、という理由だけで行った私は積極的に動けず、ミスしてばかりで悔しい思いをし、一つ一つの作業の意味をしっかりと理解して牛についてもっと勉強したいと思うようになりました。そこで私は、実習中に注意されたことや自分で気が付いたことなどを細かくメモして、実習前や実習後に必ず確認することにしました。また、共進会にも参加しました。初めての共進会で酪農家さんのあたたかさに触れ、私の牛への興味は酪農経営に関わっていきたいという気持ちに変化したのです。その後、共進会や勉強会に何度か参加し、藤曲さんから「よく動けるようになったな」と声をかけてもらうようになったころ、酪農をしている以上避けて通ることはできない出来事に直面しました。学校で飼育していた乳牛が乳房炎になり淘汰されてしまったのです。それは、今までの私の考えを大きく変えるものでした。私は高校に入学するまで乳牛たちは寿命まで生き続けるものだと思い込んでいました。しかし、先生に「牛はペットじゃない。経済動物だから乳を搾れなくなった以上、淘汰することは仕方がない」と言われ、頭では理解することができたものの、助けてあげられなかった悔しさがこみ上げると同時に、家畜の飼育者は矛盾する思いを抱えているのだと気が付きました。たくさんの愛情をかけて育てた牛を最終的には自らの判断で淘汰したり、人間の都合で改良した結果、けがをしやすくなってしまったにも関わらず、乳生産ができなくなったら淘汰する。そんな酪農の姿に疑問を持ちました。その時から、ただ酪農に携わりたいという気持ちだけでなく、何か牛たちのために自分にできることはないのかと考えるようになりました。そして、色々な酪農家さんの飼育方法を見たいと思い、実習させてもらおうと考えていました。しかし、そんな矢先に新型コロナウイルスが流行してしまい、実習に行くどころか外に出ることすらまなくなってしまうしました。3月から続いた数か月に及ぶ自粛生活は本当に辛いものでした。牛が好きで牛たちとずっと一緒にいるためにこの部活に、この学校に入学した私にとってこれ以上の

苦痛はありません。それに加え、入学当初からずっと世話をしてきた牛が休校期間中に股関節脱臼で起立不能になり、淘汰することになりました。夜中に何度も立とうとしたのか、体を引きずった跡がいくつもありました。何度頑張っても立つことができず、苦しんでいる姿を想像すると本当に胸が痛みました。移転前の旧校舎ではケガなどはほとんどなく、牛が股開きすることさえ知りませんでした。新校舎に移転し、牛舎がフリーストールに変わってから、二度も同じ事故が起こっています。それまでは、「繋ぎ飼いで自由がないなんてかわいそう」と思っていたのですが、この事故により、次第に「自由だからいいわけではない」、「フリーストールがカウコンフォートではない」という考え方に変わっていききました。苦しそうに横たわっている姿を見て何か自分にできることはないか調べていると、股関節脱臼は発生するとそのほとんどで治癒することがなく、淘汰せざるを得ないということを知り、衝撃が走りました。さらに、起立不能牛の死亡または廃用となった事故の約半分が股関節脱臼によるもので日本全国では2006年～2008年の3年間で毎年7～8千頭発生し、乳牛の死亡廃用事故の第2位に位置しています。

私は、牛が長生きして寿命を全うすることが幸せだと考えていましたが、このことをきっかけに考えが変わりました。夢である新規就農を叶えた際の目標はこれまで、乳生産を目的とする牧場とそうでない牧場で分け、けがや病気などで乳生産が不可能となってしまった乳牛をふれあい体験用の牛として少しでも長生きさせてあげたい、というものでした。しかし、健康とは言えない状態で長生きさせて本当に幸せなのか、たとえ短い命だったとしても人間にお肉として食べてもらうことが幸せなのか、様々な考えを巡らすうちに何を一番すべきことなのか考えました。自分なりに考えた理想の牧場は「けが・病気がゼロ」の牧場です。けがだけでなく、主に乳房炎などの病気にも常に気を付けなければなりません。乳房炎は乳牛の死傷と死廃事故の原因の1位で、酪農とは深く関係のある病気の一つです。また、近年は長命連産性も注目されており、2.5産が平均となっている現在の状況は必ず解決しなければならない問題です。

私は、これまで牛がけがをした後、病気になった後など起きた後のことしか考えていませんでした。しかし、けがや病気で廃用となってしまった牛たちをどうするかよりも、そのような牛を出さないようにすることが最も大切で工夫が必要なことではないかと気が付きました。例えば、一頭一頭のスペースがしっかり確保し密飼いを避けること、硬く滑りやすい床は避け、床に溝をつくり牛の蹄が引っかかるようにすることです。また、牛群構成や削蹄の適正化、発情の同期化を抑制することなども考える必要があると思います。そのためには、広大な土地と、設備や機械が必須となります。一からすべてを作るとなると莫大な費用がかかり現実的ではありませんが、近年問題視されている高齢化による後継者不足や耕作放棄地の問題をうまく利用することで、酪農をするための土地と設備が確保できます。多少の修繕や

追加工事などは必要になるかもしれませんが、一からすべて作るよりも費用をかなり抑えることができます。また、給与する乾燥を輸入に頼らずトウモロコシやイタリアンライグラスなどを自給することで、飼料費の削減につながります。また、長命連産性をふまえて、1頭につき9産～10産を目標とし、「なるべく牛を長持ちさせる」ことで経営利益が増加し、牛舎の修理や改善、増頭に充てることができると思いました。

牛たちが何を思っているのか、感じているのか私たち人間には理解することができません。しかし、痛い思いをして苦しみながら死にたい生き物なんていないと思います。牛たちは生きている間ずっと私たちに食べ物を供給してくれています。そんな大切な牛たちにたくさんの愛情と十分すぎるほどの飼育環境を整えた牛舎を提供し、無駄な命が一つもなくなる酪農経営を目指したいです。その夢を実現するため、北海道の畜産系の大学に進学を考えており、北海道という酪農が盛んな土地で、知識や技術だけでなく「酪農」という職業についてもより深く学んでいきたいと考えています。人にも牛にも喜ばれ、みんながまねしたくなるような酪農の姿を目指して。

ご本人による朗読を
こちらからお聴きになれます。

